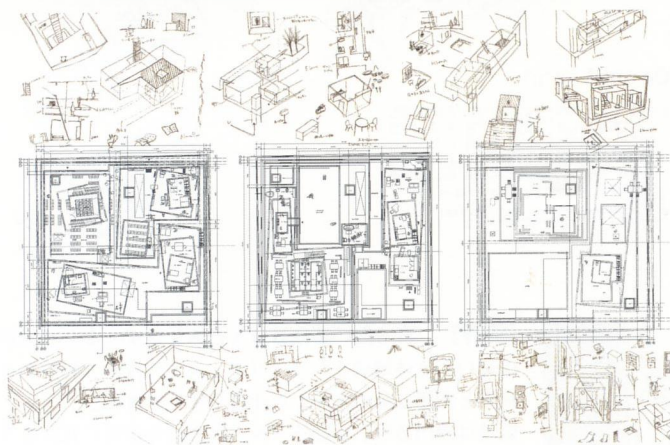




つかずはなれず

丹沢祐太 (たんざわゆうた)

日本大学 理工学部海洋建築工学科



近代の交通手段は船から車へシフトすることで、建物は川に対して背を向けてしまい、海や川はゴミ捨て場になり臨海部に埋め立て地を作るまで拡大していった。本計画地である豊洲、東雲も例外ではない。しかし、その埋め立て地には、現在再開発のプロジェクトにより住環境が整えられてきており新たな都市が形成されよとしている。従来の敷地と違い、埋め立て地という過去の歴史がないこの場所に、今からという歴史を作りだすような、まるで無限に広がる「入れ子」の集合住宅を計画する。入れ子は単純な形態であり「通路」や「路地」のような空間が続く。「通路」は生活の中でそれが自然に隔たりと意識されたり、つながりと意識されたりするものである。人々の生活が拡大、縮小するような従来のアクティビティーのない完結した住戸間同士の寂しい関係ではなく、建物内に連続的な関係性をあたえ入れ子は広がっていく……

【講評】 この作品は、学生としてのチャレンジ精神と叡智に満ちた方法論の実験である。作者は最初に単位空間としての不完全なキューブを規定し、その外側に一回り大きい直方体を角度と開口部を吟味しつつ配し、更に外側に…と言う「入れ子」構造で空間を構成し続ける。特記すべきは、例えば、一つの空間を住人Aと住人Bで「見える」「所有する」がズレる形を創り上げ、AとBの間で領域の新たな関係性を創り出している点である。この関係を部屋からスタートさせ、住戸・集合住宅・都市にまで拡張できた点は、この手法の有効性を実証している。その意味で作者のこの実験は突出した成功を収めている。今後は、建築作品として空間の質の更なる向上を期待する。 [審査員：古里 正]